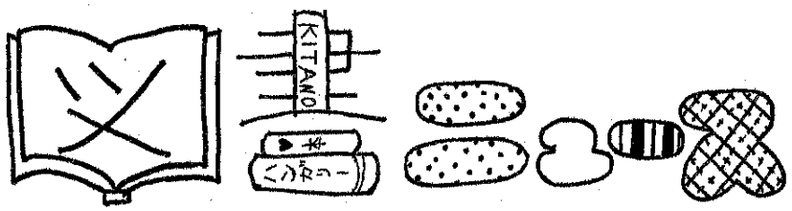


Sziasztok！ こんにちは（複）

大阪府立北野高校図書館
第2号　2021. 7. 16 発行

こんにちは。1年生の英語科の山本美里です。みなさん、テストお疲れ様！　もうしばらく頭を使いたくない、って人もいるかもしれませんね。荒んだ心を癒してくれるものを探している人もいるのではないでしょうか。ありますよ、ぴったりの本が…！　今回まず紹介するのは、頭を使わずただ眺めるだけでも楽しめて、色鮮やかなページに引き込まれ、目の癒しにもなる一冊です。

Nagyon meleg van！
とても　あつい
ナ ニョ ギョン　メレグ ヴァン

◎　ウィリアム・モリス　　クラシカルで美しいパターンとデザイン
海野　弘（解説・監修）　パイインターナショナル　　727U

みなさん、19世紀のロンドンで誕生したモダンデザインの天才、ウィリアム・モリスについて、聞いたことはありますか？　彼のデザインは、お花や鳥などの自然を、幾何学的・平面的に敷き詰めたもので、従来のリアルな装飾美術が一般的であった世界からすると、革命的なデザインでした。この本は、そんな彼の作品集です！

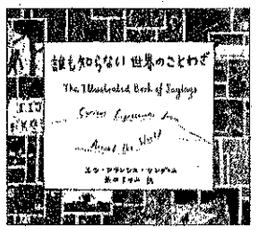
きらきらの銀色の表紙は、鳥と植物の模様で埋め尽くされており、本を開く前からモリスデザインの世界へと誘われます。そしてこの分厚い本を開くと、壁紙やタペストリー、挿絵、宗教画、活字デザインなどの色とりどりの作品が次々と目に飛び込んできます。その数なんと250点！　そのそれぞれに、タイトルと解説がついていて、さらにモリスや彼を取り巻く人々についてのコラムまでたくさんの写真とともに充実しています。

ページをめくるたびに、「わあ、この模様は部屋のカーテンにしたいな！」とか、「ああ、お風呂の壁がこんな模様のタイルならいいのになあ！」とか、「こんな柄の壁があるカフェでケーキでも食べたいなあ！」とか、想像力が掻き立てられます。そこで、私のように考える人は多いはずだと思い、〈🔍 ウィリアムモリス　ワンピース〉で検索してみると、ありました、25,000円のとてもかわいいワンピースが…。（私は普段着にこんなに払えないので諦めました…。）でも、本を見て想像するだけでも楽しいです。この図書ニュースが黒白なので、このワクワクをみなさんと共有できないのが残念です。これはもうこの本を借りて実際に見てもらうしかありません。

また、巻頭には、モリスの生涯について、年表や相関図、写真や地図などとともに、詳細に記述されていて、歴史好きの人にもおすすめです。さらに、その文章すべてに英語訳がついているのです、一石二鳥！　結構まとまった分量がありますが、みなさんが無理なく理解できるレベルなので、英語で読んでも面白いですよ！

デザインに興味がある人もない人も、この本をぜひ目の癒しと想像力の強化に使ってください。

Mit csináltok a（冠詞） nyári szünetben？
何を　する（あなたたち）　夏の　ニャーリ　スネットゥベン　休みに



◎ 誰も知らない 世界のことわざ
エラ・フランシス・サンダース（著）前田まゆみ（訳）創元社　388 SA

見ているだけで癒される、楽しい本ならまだあります！　2冊目のこの本では、なかなか他言語には見られない、世界の独特なことわざ51個と出会うことができます。（日本語だと「猫をかぶる」などが登場。）　実はこの本は、昨年の図書ニュースで紹介させていただいた、『翻訳できない 世界のことば』（801 S11 1）（これも最高に素敵な本）と同じシリーズです。このシリーズの本はどれもデザインがおしゃれで、全ページに見られる挿絵も全部ユニークでかわいいです。それではみなさん、次のことわざの意味を、考えてみてください◎

①　小さなアヒルを吹き出す Pūst pīlītes (ラトビア語)

②　あなたのレバーをいただきます جیگرتو بخورم jeegaretō bokhoram (ペルシア語)
③　私の別荘は、ずっと外れにある моя хата скраю (ウクライナ語)
④　青の問いに緑の答えを与える [illegible] (チベット語)
⑤　エビサンドに乗って滑っていく Glida in på en räkmacka (スウェーデン語)

Érdekesek a közmondások…！
エールデケシェック　おもしろい（複）　ア　コズモンダーショック　ことわざ（複）

どれもパッと意味が想像つかないですね…！ 答えは裏面をチェックしてください。

この本を読み終わる頃にはみなさんも、「言語っておもしろい！」という気持ちに浸っていることでしょう。また、見慣れない多言語の文字に興味を持った人には、『図説 世界の文字とことば』（町田和彦 河出書房新社 801 M8）もおすすめです。

これを書きながら気が付いたのですが、私は「世界の～」という本を選びがちなようです…。今借りている本も、『小さな幸せがみつかる 世界のおまじない』（亀井英里 パイインターナショナル 147 KA）なので。この本には、フィンランドの「夏至の日に7種類の花を摘んで、枕の下に置いて寝る」などの50のおまじないが掲載されています。それぞれのおまじないに、その由来となる、言い伝え・神話・宗教行事などについてのコラムが付いていておもしろいし、絵もカレンダーにしたいぐらいかわいいのです。ただ、おまじないが掲載されている国が西欧に偏っているのは残念です。みなさんが、どれぐらいおまじないや運を頼りに生きているかは分かりませんが、この本も併せて手に取ってみてください。

◎ 運命ではなく
ケルテース・イムレ（著）岩崎悦子（訳）国書刊行会　　993 KE

運が良いとか悪いとか、運も実力のうちとか、最初からこうなる運命だった、なんて表現をたまに耳にしますが、何かが起こった時に、そういう運命だったと考えるのか、自分で選んだ道だと考えるのかは、人それぞれですよね。例えば、私は大学で外国語学部ハンガリー語専攻だったのですが、高校3年生の冬、志望学科を提出する前夜に、急遽ハンガリー語学科に決めました。治安、食べ物、日本でのレア度で決断し、ハンガリーについて何も知らぬまま入学しましたが、大学でその魅力にドはまりし、今となっては、ハンガリーでなければならなかったんだ、当時の自分の決断は運命的だった、とさえ思えてしまいます。（他言語を選んでいても、間違いなくドはまりして同じことを言っているでしょうが…。）このような人生の転機が来たとき、それは運命なのでしょうか、はたまた私たち自身の決断なのでしょうか…？

この『運命ではなく』という本は、ノーベル文学賞を受賞したハンガリー人の作家の代表作で、彼の実体験をもとに、13年もの歳月をかけて書きあげられた自伝的小説です。ナチス強制収容所での実体験をもとに。

主人公の少年「僕」はブダペシュトに住む14歳のユダヤ人。ある日突然、警官によって訳も分からずバスから降ろされ、同じくユダヤ人の友人たちとともに、「働くため」ドイツに送られます。着いた場所は、アウシュビッツ強制収容所。そこで「選別」されてガス室を免れた少年は、その後いくつかの収容所を転々としながら過酷な労働に従事し、怪我で働けなくなった後は、労働に復帰できるよう治療のため医療キャンプへと移送されました。その医療キャンプに着いてから戦況が大きく変わり、生き残った収容者は敵軍により解放され、少年もハンガリーへ帰ることとなります。

この小説は「僕」の一人称で書かれており、少年が経験し感じた通りに、順を追って話が進んでいきます。そのため、ブダペシュトでバスから降ろされた際も、友人らと列車でアウシュビッツに到着した際も、今後どうなるかなんてまだ知る由もなかったため、不安や恐怖は一切語られていません。寧ろ、周囲の人の様子や感情、空や建物の状態などが、少年の鋭い洞察力によって淡々と客観的に語られています。また、その後友人と引きはがされ、草や砂でも迷わず口に入れるほどの飢えや、毎日の暴力で人相が変わるほどの怪我、ひどい衛生状態で悪

化していく病気に苦しめられながらも、この少年は、周りの人の行動やかすかな感情をくまなく観察しながら、生死の瀬戸際まで、状況を分析し思考することをやめませんでした。

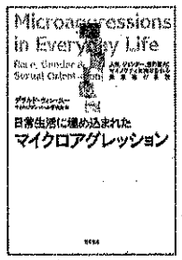
私は大学時代、留学中にアウシュビッツに訪れましたが、あの門をくぐる時は鳥肌が立ったし、施設を見て回った際は立ちすくんで、思考停止するほどショックが大きく、今でもあの恐怖は心に焼き付いています。だからこそ、この本で少年が淡々と語り、何が起きても受け入れて進んでいく様子に、私は言葉ではうまく表せない違和感を覚え、始終ぞっとするような、どこか腑に落ちないような気持ちでこの本を読み終えました。

他にも、ホロコーストを扱う本や映画はいくつか見ましたが、この本は他の作品とは少し異質な気がします。他の作品では、恐怖や悲しみ、絶望が強く感じられました。一方この本では、苦しい日々が淡々と繰り返されるやるせない単調さと、時間の経過とともにありえない事態でも当たり前のものとして受け入れてしまう奇妙な変化が印象的で、そこにあまり納得がいきません。ブダペシュトに無事生還した少年は、再会を喜んで温かく迎えてくれた知人たちと口論になり、「僕も与えられた僕の運命を最後まで生きた。僕の運命じゃなかったけど、最後まで生きたのだ」「運命とは僕たち自身なのだ」「強制収容所における幸せについて、話す必要がある」と語るのです。悲惨な出来事がやって来たのではなく、自分たちが進んでいった、と言うのです。この最終章は、何度も読み返しましたが、やはり少年の感情を理解することはできませんでした。幸い彼のような状況に置かれたことのない私は、寧ろ理解できてはいけない感情なのかもしれません。

ホロコーストを扱う作品とこれまであまり出会っていない人には、まだこの本はお勧めできません。ですが、この本は、極限状態の少年の視点を通して、人間の尊厳について考えさせられるような作品です。話に向き合う時間がたっぷりとあるときに、いつか読んでみてください。そして、みなさんはこの本をどう解釈したのか、私に教えてください。私も、もう少し人生経験を重ねた後、もう一度読んでみます。

みなさんの中には、ただでさえコロナで暗いご時世なのに、こんな重い本を読んで考えこみたくない、という人もいると思います。その通りです。もちろん、元気な時に手に取ってください。ただ、わたしたちが明るい未来を創るためには、時には辛い過去から学ぶ必要があります。戦争や人災、差別や迫害などについて、学ぶといっても、学校で学ぶだけでは足りません。実際にその場を訪れたり、それについての本や映画を鑑賞したり、経験者の話を聞いたりと、その辛い出来事を自分で「間接的に実感」すべきだと思います。もちろん、心に余裕ができたときの話です。人間の過去の失敗をできるだけ多く「間接的に実感」することで、過去の残酷な苦しみを風化させてはいけない、未来は素敵でなくちゃいけない、という気持ちが強くなるのではないでしょうか。

コロナ禍が終われば、いずれアルバイトを始めれば、自分のお金で自由に旅行ができる日が来ます。将来みなさんも、国内外いろんな場所にぜひ足を運んでください。わくわく楽しい経験もしつつ、たまには悲しい歴史を「間接的に実感」し、過去に未来に現在に、思いを巡らせてください。『人類の悲しみと対峙する　ダークツーリズム入門ガイド』(いろは出版　290 I20 I) この旅行ガイドブックもお勧めします。百聞は一見に如かず、です。



◎ 日常生活に埋め込まれた マイクロアグレッション

デラルド・ウィン・スー（著）マイクロアグレッション研究会（訳）明石書店　361 SUE

「ああ、ホロコーストだなんて、昔は本当にひどいことが起こっていたんだな、でも外国では今でも差別が絶えないよな…。」と思ったみなさんに質問です。あなたは差別主義者ですか？　「とんでもない、差別なんてするわけない！」と答えたみなさんにこそ読んでもらいたい本を、最後に紹介します。

マイクロアグレッション、という言葉を聞いたことはありますか？　最近注目されている差別概念です。その特徴は実に厄介で、差別をしている側に悪意が全くない場合が多いです。たとえ善意を持って発言・行動しているとしても、無意識に持っているあるグループへの偏見や恐怖感、嫌悪感が自分の発言や行動に現れていて、本人も周りの人も、それが誰かを傷つけていると気づきにくいのです。つまり私たち誰もが、被害者にも、もちろん加害者にもなります。あからさまなヘイトは社会で批判されます。しかしマイクロアグレッションの場合は、その危険さに目が向けられないまま、受け手の心にどんどんと蓄積していき、精神的・身体的にひどい苦痛となります。

何でも深く話し合える人間関係が心地いいのかもしれませんが、誰とでも腹を割って対話ができる人はそういないでしょう。差別のこととなると尚更、深く議論を交わすことはしばしばタブーのように避けられることさえあります。理由としては、自分が持っているかもしれない他者への偏見に気づくのが怖い、身近な人による無意識な発言や態度でつらい思いをしたくない、など他にも多々あると思います。マイクロアグレッションなんて話題なら、結局は表面的な意見だけ交わして終わってしまうかもしれません。この本には研究結果や日常にみられる具体例が数多く取り上げられており、とても気づきが多く、深く考えたい人の消化不良を助けてくれます。

ちなみにこの本は 454 ページもあり、借りたときはやる気に満ち溢れていましたが、結局半分も読めませんでした…。自分が読み終えてもいない本をみなさんに紹介してしまい、すみませんでした。

以前の私は、本は全てあとがきまで読んで完全に理解しないと読んだと言ってはいけないと思っていました。それで変にがんじがらめになり、最後まで読めなさそうな本は、最初から手に取らず、本を読むことが減っていきました。今でも自分の中で、ずぼらと完璧主義が戦っていて、SNS でも丁寧な返事をしないといけない気がして面倒くさくなり、それで返事が遅れた代償にもっと丁寧に返信しなくてはと思う日々です…。もちろん、完璧にタスクをこなそうと頑張ることも、一度始めたら最後まで諦めず続けることも、とっても大切です！　ただ、その気持ちが強すぎると、最初の新しい一歩を踏み出すことに物怖じしてしまったり、視野が狭くなって一本道しか見えなくなったり、自分自身へのプレッシャーが重くてしんどくなったりしてしまいます…。

この本の目次を見て私は、興味がある章、読みたい章だけ選んであとは飛ばしました。以前の私に言わせれば、言語道断のずるい読み方ですが、読んだ箇所からだけでも色々学び、考えさせられました。様々な種類の本を読めば、様々な世界に触れられ、様々なことに挑戦すれば、目の前に様々な世界を広げられると思います。時間は限られています。たくさんのことを全部完璧に、とはなかなかいかないものです。だからといって、一つのことだけを完璧にして後のことには蓋をするわけにもいきません。自分の前には一本だけの真っ直ぐなレールが敷かれていると思うのももったいないです。自分の世界を広げる出会いは、多ければ多いほど楽しいです。それなら、色んなことに挑戦しつつ、「まあいっか、こんなもんで。」の精神もたまに持ち合わせておくのが、意外と一番いいのかもしれません。私もこの精神を上手く活用して、自分の中のずぼらと完璧主義の手を結ばせたいものです。

ケセネム コソノム　ありがとう
Köszönöm szépen！とても
スイェーペン

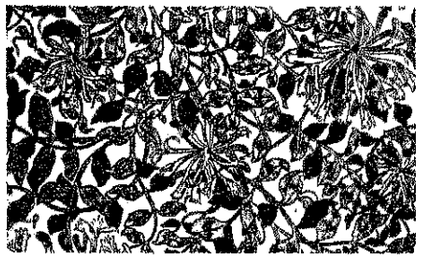
ここまで読んでくれた方、ありがとうございます…！

✿ 夏休みはもうすぐそこ ✿

今は長期貸出期間で、8 月 23 日まで借りられます！

いつもは読まないような本に手を伸ばしてもいいかもしれませんね☺

さようなら（複）
スィアストック
Sziasztok!
Szép napot!
スィーープ ナポットゥ
いい 1日を



モリスのデザイン
◀ Honeysuckle
Wallflower ▶
カラーはとても素敵です、
本でチェック！

答え：① くだらないことをべらべらしゃべる ② あなたをじゃまする ③ 今の会話の話題がよくない
④ 自分に関係ない ⑤ 自分らしくいられる ⑥ 努力せずに安楽に過ごす